

笑いの中で人権を考える

同和問題講演会

8月23日、青山ホールで同和問題講演会を開催しました。

ステージでは、桂文福さんの高座のほか、落語や腹話術も行われ、訪れた人からは、しきりに笑い声が上がりました。

講演した桂文福さんは、「習慣やしきたりなど、自分がおかしいと思ったらやめるべき、それで何かいう人は人権意識が低いのではないのでしょうか」と話しました。

また大喜利では、河内音頭にあわせて人それぞれに個性があり、お互いに認め合うことが大切だということを書いて歌いました。



人権についての話の中に笑いを交え、講演の最後には、会場から大きな拍手が送られました。



住みよいまちづくり

いがまち人権同和教育研究大会

8月21日、ふるさと会館いが大ホールで、第34回いがまち人権・同和教育研究大会全体会を開催しました。

基調提案のほか、宮崎保さんと森本おりえさん

による「ちょっと心を かしてくれませんか」と題して、差別の現実を知ってもらおうと、自らの体験を歌やピアノ演奏をおり交ぜながら講演を行いました。

宮崎さんは、「実際に存在する差別問題がどれだけ苦しい話であっても、事実を伝えて知ってもらい、良いか悪いかを判断してほしい」と話しました。

歌で伝えて、心で感じてほしいという思いを感じる力強い演奏は、私たちがこれからどのように、差別に向き合っていくのかを考えるいい機会を与えてくれました。



差別のない社会を目指す

上野同和教育研究協議会

第24回上野同和教育研究協議会研究大会が、9月5日、伊賀市文化会館で開催されました。

講演会では、講師の民放テレビ局のドラマプロデューサーで作家の栗原美和子さんが、実際に体験した悔しくて悲しい、現在も残る差別の根深さについて話しました。栗原さんは、自身の結婚を機に、部落問題が今なお続いている現状を知り、部落問題をありのままに描いた小説を発行しましたが、家族からの大反対があったこと、マスコミ関係の冷たい反応があったことなどを思い出し、涙を流す栗原さんの言葉一つひとつが、経験した人にしか分からない差別の根深さ、また経験の重さを物語っていました。



栗原さんは、「部落問題を描いた本が、堂々と読める世の中になってほしいです」と話し、最後に、皆さんに素敵な奇跡が起きますようにと優しく語りかけ講演を終えました。

固定概念を打ち破る

男女共同参画推進セミナー

9月16日、ライトピアおおやまで男女共同参画推進セミナーを開催しました。

このセミナーは、毎年、男女共同参画について講演などをしていましたが、今年は、趣向を変えて、落語家の桂あやめさんと林家染雀さんによるお話などを行いました。

はじめに、桂あやめさんが落語家として入門するとき、女性にとって「落語家は女には無理」「女のする仕事ではない」などと反対された話や、入門してから「古典落語では、お客さんに女性を演じているのか男性を演じているのか解ってもらえず、笑いが取れなかった。新作落語をやるようになってからは、笑いが取れるようになり、女性を演じるのが楽になった」と話しました。

その後、ふたりは芸者姿に変身して、姉様キングスとして音曲漫才を披露しました。

最後にふたりは「固定概念を打ち破って何でもやってみてください」と話しました。



まちがどTopics